

新学習指導要領の趣旨を理解し、授業や研究会の在り方のパラダイム転換を図る。

■これまでの授業「教師が教え、子供が教わる」

「教師が発問をし、子供たちに考えさせる。意見を出させる。それを教師がまとめる。」、教師が教え子供が教わる構図だ。私たちは、こうした授業が当たり前と思い込んできた。そのため、子供の「主体的」な授業展開ができなかった。教科内容を教える、教科書を教えることに何ら疑問をもたず授業を展開していたからだ。

多くの学校で「対話的で深い学び」が重要と考え、班学習も行っている。班で意見交流をし、代表の子が発表をし、全体学習で内容を報告する方法だ。最後は、教師がまとめを書き、それを写させる。教師が正解を話すことが当然と考えるからだ。子供たちも、班学習や教師から教わった知識に何ら疑問をもたず問題を解く。スツップの問題が解ければ、「深い学び」が出来たと錯覚する。こうした授業の行き着く先は、単なる「知識・技能」の授業だ。こうした授業をしてはならないことに気付いて欲しい。

■これからの授業「子供が主体的に動き、教師はそれを認め支える」

「子供たちが学習のめあてを共有し、子供たちが解決のために計画や見通しを立て、子供同士の対話の中で教え合いをし、課題を解決し、自分の言葉でまとめ、学びに向かう力が付いたかどうかを振り返る」、教師が教え、子供が主体的に課題解決を図る問題解決的な授業の構図だ。新学習指導要領では、子供が「主体的・対話的で学び」と位置づけた。すなわち、教師は、学習のめあてを子供たち自身に見つけさせ、全員で課題解決へ向かうように支える。また、できるだけ教えないことに留意し、子供の主体的な学びを見守り認めるようにすることだ。こうした授業を行えば、教師の指示言葉や説明が必ず減る。

授業展開に慣れていないとか、難しいからを理由にしてはならない。それを理由にしては、学力も絶対に向上しない。私達はこの数年、子供が主体的な授業展開をや学習リーダーが授業を進行していくシステムを創ってきた。一層の「教える教師から教えない教師（子供が教師を頼らず主体的に動く）像」を目指すよ。

■授業観察の視点「教師の指導方法の観察から、子供の動きの観察へ」

これまでは教師の指導方法に視点を当てていたため、授業者の発問、板書、資料、説明、指示等、を見て授業評価を行っていた。教える授業者を見ていたのだ。授業評価は、本来、子供が意欲を持って授業に望んでいるか、目を輝かせて課題解決に向かっているか等、教師でなく子供を見ることが当たり前だ。子供の「主体的・対話的で深い学び」等を確かめるにはなおさらである。教師から子供を動きを見る授業評価に変えるとよい。

授業観察の視点は、①子供は授業に意欲的に参加しているか ②授業過程の計画を立て、見通しをもち学習活動に向かっているか ③課題解決に向け、アウトプットや教え合いができたか ④課題のまとめを自分の言葉で書けたか ⑤学びに向かう様子の振り返りができたか等が考えられる。

なお、こうした授業観察や授業方法を学校で決めたら、全教師が同じ方向へ向かわなくてはならない。同じ問題解決的な指導方法・同じ板書用グッズ・同じ板書内容、子供も教師も同じ授業観察の項目等のユニバーサルデザイン化を図る。そのことにより、教師間の話題は同じになり、自分ならどうするかを考えるとよい。

■子供自身のミニ授業反省会「教師の授業反省会だけでなく、子供のミニ授業反省会の実施へ」

これまでの指導方法が変われば、授業後の教師だけの授業反省会も変わってくるはずだ。教師主体の授業反省会から、子供自身のミニ授業反省会と変わる。それは、子供自身が主体的・対話的で深い学びを創ったかどうかの授業評価は、子供自身が行わざるを得ないからだ。授業評価という形で子供同士が協議すれば、すぐに次の学習へその反省を活かすことが出来ると思う。高知県のある学校では、前述した授業観察の視点で学習リーダーがミニ授業反省を進めている。子供は自分たちで授業を創っていくことの重要性を感じてきている。

教師は、子供たちの授業反省会を参観するため、子供たちの生の声を聞くことが出来る。教師はそれを受け、授業反省会を行う。こうした当たり前のことをこれまでどうして行ってこなかったのだろう。それは、教師の「教える」を評価することが学校常識であったからだ。新学習指導要領の趣旨である子供が「主体的・対話的で深い学び」を創ったかどうかの評価は、子供の「ミニ授業反省会」ぬきでは出来ないと思う。

